

## 踏 み 跡 < My mountains >

奥秩父	金峰山から甲武信岳へ縦走	No.021
-----	--------------	--------

国土地理院発行の5万分の一の地図「五日市」の主な稜線（奥多摩）を歩いてしまい、次は奥秩父でも…という考えが湧き上がってきた。その最初のプログラムとして奥秩父縦走に挑戦することになった。三日間を山の中で過ごすのはこれが初めてだし、しかも単独行とあっては緊張せざるを得ない。

昭和 38 年 7 月 26 日

20:30頃だったろうか、まず新宿駅まで来て驚いた。乗ろうと思う23:45発長野行列車待合の場所である南口へ行ってみると、何と駅の外に並んでいるではないか。先頭が南口改札口前で、六列の行列の最後尾は陸橋を渡り追分のジャズ喫茶ACBの前。先頭に並んでいる人に聞くと、正午から来ているというから話にならない。多分乗ることは不可能だろうと思い駅構内に引返すと、「ただ今定員の四倍以上が並んでいる」と構内放送がアナウンスしている。さらに気をつけて耳を傾けていると、中野駅発0:10の臨時松本行があるという。見送りに着てくれた恩田と別れ、中野駅へ移動。彼には準備段階で有形無形の世話になった上で見送りにまで来てもらい、感謝。

昭和 38 年 7 月 27 日 (快晴)

中野発の臨時列車は新宿駅ほどにひどくはないものの、定員の約二倍だという。比較的空いているデッキでキスリングを枕に横になる。こう混んでは出発前の緊張などまったくない。苦勞して確保した陣地を人に手渡さぬようじーっと寝ているのみ。

蕪崎に到着、4:14。私よりはるかに大きなキスリングを背負った連中がウジャウジャ降り、駒ヶ岳神社行のバス乗り場にザックを下ろしている。駒ヶ岳神社行のバスは4:30頃から何台も何台も来て、登山客を満載しては出て行く。

金峰山に向かう増富温泉行の列は 100 人たらず。増富温泉行のバスは5:00発、冷えた握り飯を食べ終わった頃に入ってきた。小型のバスはすぐに満員になり発車。

初めて「荷物代」なるものを取られたので何か損したような気がした。運転席の横に寝かせたキスリングの上に腰掛けて激しく揺れるバスに身を任せているうちに、コックリコックリ。満員列車の疲れかそのまま意識不明に……。塩川の流れに沿った急カーブの続く道になる頃、柱に頭をぶつけてやっと目が覚めた。

海拔1000m の増富温泉は想像したとおりの寂れた静かな温泉、水を汲んですぐに出発。6:30をちょっと回っている。

本谷川に沿い一時間ほどで道は二股になり、右に木賊峠を越えて昇仙狭に抜ける道を分け、金山平に向かいゆるやかに登っていく。正面に立つ瑞牆（みずがき）山は 2230m、その鋭い剣のような岩峰から察して日本の山とは思えないおもむきがある。木暮理太郎博士がこよなく愛したという。

富士見平まで来ると海拔 1800mを越える。瑞牆山の岩峰は小さな沢の向こう側に手に取るように近い。ビスケット、ピーナツ、チーズ、干しブドウ等の入った一回分の行動食の袋を出し、一回目の昼食。燦々と注ぐ夏の日差しの下で、我が肉体が求めているのは「水」だけのようだ。

大日小屋を過ぎると海拔2000mになる。2200mの大日岩は岩の上に腰掛けると、西にひととき大きいハヶ岳の山並みが首を雲の中に突っ込んでいる。(下写真:大日岩からの眺め)



## 踏み跡 < My mountains >

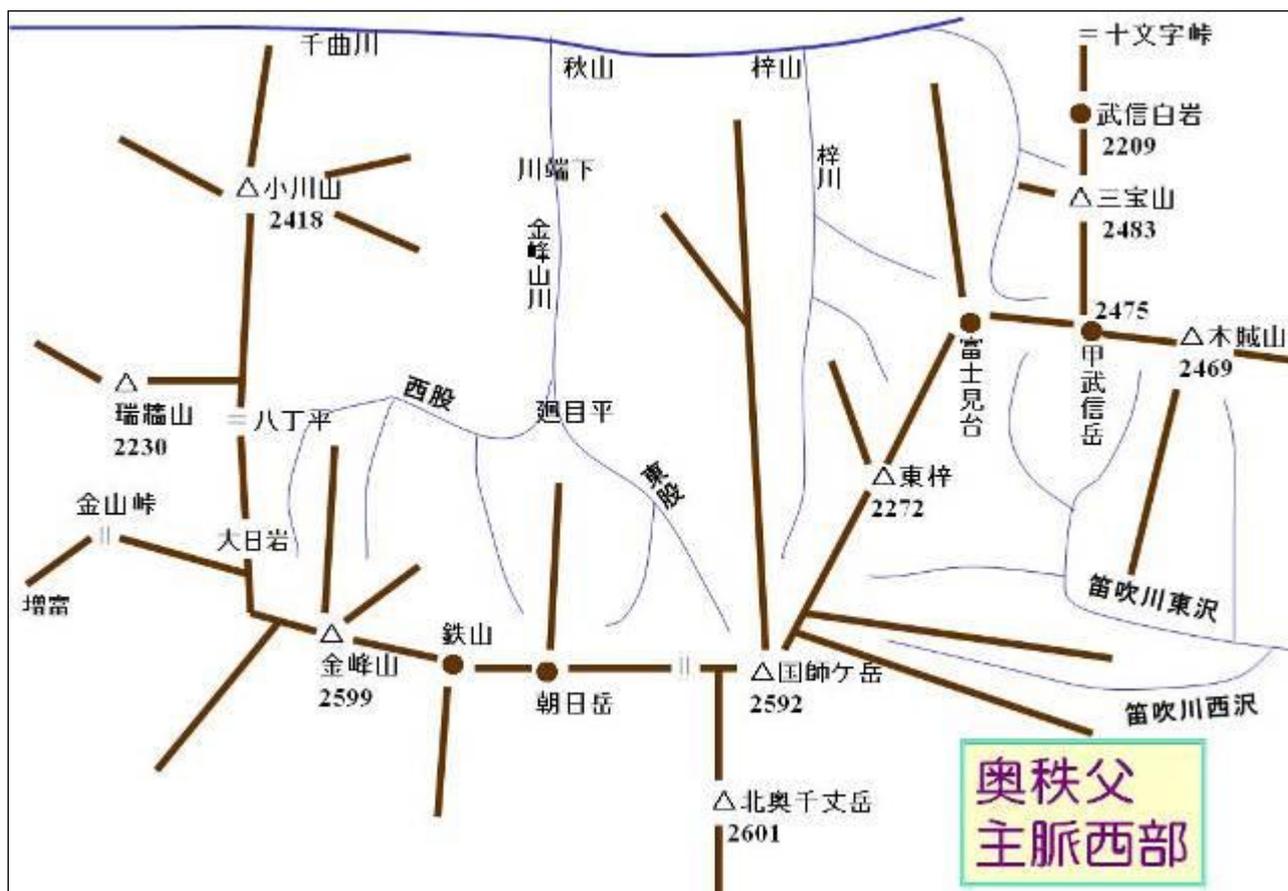
樹林帯を抜け、ハイマツ混じりの岩峰となり、行く手に五丈岩が見え出した。五丈岩は黒くたくましく金峰山頂上の一隅に胡座している。金峰山(2595m \*注)に14:25到着。昨日までは夢の中にしか出てこなかった高さだ。ハイマツの中の岩稜、これも現実のものとなった。ハイマツを撫でる風は冷たく、火照っている体にブルンと震えが来る。素晴らしい景色を楽しんで30分の休憩。

(\*注:金峰山の高さは平成3年の国土地理院「日本山岳標高一覧」で2599mに修正された)

北に30分ほど下ると金峰山小屋がある。小屋の屋根が見えた時にわかにかに機銃掃射のような大粒の雨の攻撃。小屋がある所は海拔2494m、本日の行程終了。後で小屋の人に聞くと、毎日夕方に一時間ほどにわか雨が降るといふ。なるほど、窓の外はもう赤紫色の夕焼け空にハイマツの濡れた葉が輝いている。

飯を炊いてたまねぎの味噌汁、小屋のストーブにめざしを乗せて夕食。

海拔1000mの増富温泉から2595mまで、暑くて苦しかったが、よくやった。20:00寝袋に入ると同時に高いびき。(自分ではわかるはずがない、小屋で一緒になった人が翌日言うには)。



昭和38年7月28日(快晴)

起床4:00、頂上まで空身でご来光を見に行く。富士山、南アルプス、ハヶ岳、瑞牆山、浅間山・・・、八方の山並みは黒く日の出前のシルエットを描いている。一面の雲海の中から日が昇り始めるにつれ黒い山並みは次第にその姿と文様を見せてくる。

小屋に戻って朝食をとり、7:00出発。東へ、東へ、鉄山(てつさん:2531m)、朝日岳(2579m)を過ぎるとまた樹林帯に入り、目を楽しませてくれるものは何もなくなくなる。国師ヶ岳の真下の大弛小屋、9:00をちょっと過ぎている。軽食をとりひと休みしていると、一匹のねずみが目の前を通り過ぎて行く。どう見ても野ねずみではなく町ねずみのようだ。せっかくの風流を壊されたような気分になり、国師へ向かって出発。

国師ヶ岳(2591.9m)10:25、日が隠れて寒く感じる。金峰山はガスで見えない。今日の目的地甲武信

## 踏み跡 < My mountains >

岳は北東はるかかなた、鶏冠尾根の珍奇な岩峰が、笛吹川の谷間に異様を誇っている。長い下りが終わり、東梓12:55、20分の休憩。まだまだ甲武信は遠い。

16:20甲武信岳(2475m)。富士川(甲斐)・荒川(武蔵)・信濃川(信濃)の三つの流れを発する分水嶺の山は雄大な膨らみを持っている。数分ほどで雨が降り出してきた。急いで甲武信小屋に向かうとすぐに止んでしまった。そういえば昨日も今頃降られた。

食事の後、隣の男と話をしている。彼は単独行で、北ハケ岳の北端から始め、ハケ岳を縦走して小淵沢に下り、葎崎で食料を買って入ってきたという。しかも、六ツ石山から氷川に下りて食料を買って、奥多摩に入ろうかな? などと言っている。話のスケールが違う。餅を差し入れしてやった。21:00就寝。

昭和38年7月29日

起床3:30、食事をせずに4:00出発。日の出を見て、真の沢林道分岐点まで下り朝食(5:00~5:40)。

三宝山三角点(2483m)6:02、ハケ岳が西の空にくっきりと見える。

奇妙な形の岩のある武信白岩(2209m)を過ぎると鬱蒼とした原生林の中の十文字峠 8:20。秩父の山の特徴である原生林と苔むす木の根、太陽の見えない世界。峠から信州側の千曲川の源流に下る。

八丁坂を下ると千曲川沿いの丘陵地帯。ここは高原野菜作りで有名なところだ。

途中の河原で顔を洗って最後の大休止(10:30~11:30)。野菜畑の中を小一時間で今回の終点である梓山部落に12:40に到着。梓川の本流と西沢の合するところで、白木屋という旅館の前がバス停になっている。バスは13:40発、千曲川に沿って50分弱、信濃川上駅へ。

14:08発、高原を走るディーゼルカー小海線は酷暑の下界をよそに、標高1300mの裾野を緑の風を一杯に吸い込んで一路小淵沢へ。右の窓にハケ岳の連なる峰々、左の窓に三日間を過ごした奥秩父の山々、正面の南アルプスの山並み、360度の屏風絵を見るように、小海線は間断なく目を楽しませてくれる。

快適に走るディーゼルカーの響きは、三日間の回想のための良きBGMになった。

小淵沢発15:04の中央線に乗り換えて新宿駅には21:20に帰着した。

以上

(修正・更新:2023年9月)